



写真:同部提供

バスケットボール部 関東インカレW優勝



写真:同部提供

男子
大会3連覇

男子大会3連覇

5月に行われた第67回関東大学バスケットボール選手権大会において、筑波大学男子バスケットボール部が3年連続、7回目となる優勝を収めた。さらに、最も活躍した選手に対して贈られる最優秀選手賞を、本大学男子バスケットボール部の牧手選手が受賞した。

今回の大会について、最優秀選手賞を受賞した牧手選手は「今年、福岡・福岡大学附属大濠高と、主将の波多智也選手(体育4年、埼玉・正智深谷高)にお話を伺った。この大会の優勝について、率直な感想を伺うと、牧手選手は「嬉しさとちょっとした安心感があったが、一点差の試合も多かったのが、ここから頑張らなくてはならないという思いがあった」と答えてくれた。波多選手は「代表選手が数人いないという状況の中、チーム作りをして優勝できたことは大きい。また、去年出場していたエースがいなくなり、新しい部員たちが活躍したことは収穫だったと思う」と答えてくれた。

3連覇という結果を収めた男子バスケットボール部だが、この大会にはどのような意気込みで臨んだのだろうか。牧選手は「去年の11月、インカレの決勝で敗れた悔しさから、リベンジするという強い思いで臨んだ」と話してくれた。波多選手は「去年はトーナメント、新人戦、リーグ戦、インカレで4冠を目指しても達成できなかったため、まずはトーナメントで取れることを決めていた」と話してくれた。

準々決勝では青山学院大学、準決勝では大東文化大学との対戦となり、どちらも点差で本大学が勝利を取っている。この接戦の状況について伺うと、牧選手は「準々決勝は前半の入りが悪く、相手のペースに流されてしまった。しかし後半では自分たちのペースになっていき、勝てた試合だった。準決勝では、終始リードはされていたが、大崩れすることなく自分たちのバスケットボールを貫くことができた」と話してくれた。波多選手は「準々決勝では思うようにいかない時間帯があったが、後半ではそれを修正し、逆転につながった。準決勝の試合では、運良く勝ったと思う」と話してくれた。お二人のお話から、苦しい状況でいかに自分たちのペースに巻き返し、勝利を掴み取ったかが伺えた。

また、牧選手に最優秀選手賞を受賞した時の心境について尋ねると、「優勝が目であったので、あまり考えがなかった。皆で頑張ってきたので、ここからさらに頑張ろうという良いモチベーションになった」と話してくれた。今後の抱負については、「秋リーグ戦のインカレで優勝を狙い、勝利所では自分が決める気持ちで、チームを引っ張り、優勝に導きたい」と話し、力強い意気込みを見せてくれた。

波多選手は昨年の怪我により、練習や試合での出場が難しいという状況にあったという。その状況の中で、主将という立場から、部員たちにアドバイスや指示など、声をかけることに苦悩を感じた日々もあったそうだ。しかし、苦しい状況にありながらも、チームのことを考えて波多選手の強い思いがあったからこそ、後輩たちに「自分たちがやる」という強い志がさらに芽生え、今回の優勝にも繋がったのではないだろうか。



写真:同部提供



写真:同部提供

筑波スポーツ

平成30年7月20日(金)
第174号

題字 中山雅史氏
(元サッカー日本代表・蹴球部OB)

(菊田文香)

編集部は見た 筑波大の活躍

5月13日、曇り空の中、関東大学春季大会筑波大学対日本体育大学の試合が、筑波大学グラウンドで行われた。開始3分で右サイドから11番河野友希選手(体育4年・千葉・流通経済大学付属柏高)がトライを決めてから、8分、13分、16分と立て続けに得点を重ねた。しかし20分に相手の激しいコンタクトにより、ボールを取れぬ試合初失点。それでも29分にライン際のスクラムから押し込んで点差をもとに戻した。35分には相手ボールのスクラムからのパスで抜け出し、相手選手を外に押し出して回避。計5トライを決め、33対7で前半を折り返した。

後半に入ってから筑波の猛攻は続き、後半2分に9番杉山優平選手(体育3年・大阪・大阪桐蔭高)の相手の不意を衝いたタックルに、13番田上徳馬選手(体育3年・熊本・熊本高)が合わせ、トライを決めた。続く6分には日本体育大学のラインアウトから相手チームのミスにより、筑波大学ボールに。そのまま杉山選手の鋭いパスで大西訓平主将(体育4年・東京・國學院大付属久我山



ラグビー部

写真:西村撮影

蹴球部



写真:連沼撮影

ある関東大学対抗戦の目標は、上位校といわれる早稲田大、慶応大、明治大、帝京大を倒して位になることである。勝ちをまつく、目指していた。今後の筑波大学ラグビー部に注目したい。(西村生)

晴天の4月11日(水)、茨城県サッカー選手権大会兼天皇杯代表決定戦2回戦が筑波大学第3サッカー場で、筑波大学第3サッカー場で行われた。この試合は、筑波大学のゴールを脅かされる場面から始まった。ペナルティエリア付近から放たれた

る立て続けのゴールにも山川哲史選手(体育3年・兵庫・ヴィッセル神戸U-18)、渡邊陽選手(体育2年・埼玉・浦和レッズ)が体を張って防ぐ。試合が動いたのは前半16分、相手のMFが放ったシュートがそのまま筑波のゴールに突き刺さり、先制を許した。その後はしばらく、筑波大学が放ったシュートは相手チームのキーパーに阻まれ、なかなか点を決めることができなかった。しかし、前半20分、パスを受けた窪田翔選手(体育2年・石川・星稜高)がゴール右隅に冷静に流し込み、同点とした。その後も筑波大学の怒涛の攻撃が続くものの相手に阻まれ、なかなかゴールを決めることができない。観客席もゴールに向かってうねり、盛り上がるが、決めきれないゴールにため息が抑えられない様子であった。そんな中、ペナルティエリアからのクロスを受けた相手側のFWが放ったシュートが筑波大学のDFに当たり、逆に相手にゴールを決められてしまう。そして、前半を1対2で終え後半戦へともつれ込んだ。後半も序盤から素早い試合展開が行われ、両者一進一退の攻防が続く。そして後半15分に差し掛かろうとしたとき、右サイドへと進み出した鈴木徳真選手(体育4年・群馬・前橋育英高)のパスが通り、ゴール右隅に強烈なシュートを突き刺し、2対2の同点になった。ここから両チームの応援は盛り上がりを見せ、グラウンドに響き渡っていく。その後も、筑波の攻撃は続くがなかなかゴールには届かない。試合も終盤に差し掛かった後半38分、ゴール前からの大きなクリアを受けた永満俊選手(体育3年・宮崎・宮崎西高)がシュートを決め、3対2とリ

筑波大学硬式野球部は過去に国立大学で唯一全国制覇を成し遂げたOBには現在中日ドラゴンズで活躍している藤井淳志選手などがある。今年のはじめに筑波大学野球部は、4月に終わったものの、毎年リーグ戦の優勝争いに加わり、着実に結果を残している。そこでこの記事では、今春に実際に観戦したリーグ戦第5週、リーグ屈指の強豪である東海大学戦(4月28日、牛久運動公園野球場)を振り返りたいと思う。

試合が動いたのは2回裏、東海大学の攻撃である。筑波大学は先頭打者に塁を許すと、送りバントを決められ1アウト2塁のピンチに陥る。そして東海大学の7番海野選手に2ベースヒットを打たれ、1点を先制されてしまう。

だがその後の筑波大学は、先発投手の村木文哉投手(体育2年・静岡・静岡高)の好投と味方の好守備で無失点に抑え続けた。しかし、得点の中々挙げられない状況が続く。

そんな状況を打破したのが、7回表の筑波大学の攻撃である。先頭の高瀬将太郎選手(体育3年・茨城・常総学院高)の打席、相手捕手の捕球ミスに付け込み、ランナーが進塁。2・3塁にランナーが進むと、高瀬選手もフォアボールで出塁し、満塁の状況を迎える。そして、9番打者の若狭大地選手(体育3年・愛媛・今治西高の轍

「これからこれから」という励ましの声が響く。その後、両者譲らぬ展開を見せ、試合は後半へと突入した。相手はボールを保持したまま苦しい展開が続く、何度か得点のチャンスを作り出すが、決めきれず、痛い敗戦となった。しかし、雨がやまない中、戦った選手たちにスタンドからは暖かい拍手が送られた。(連沼礼子)

硬式野球部

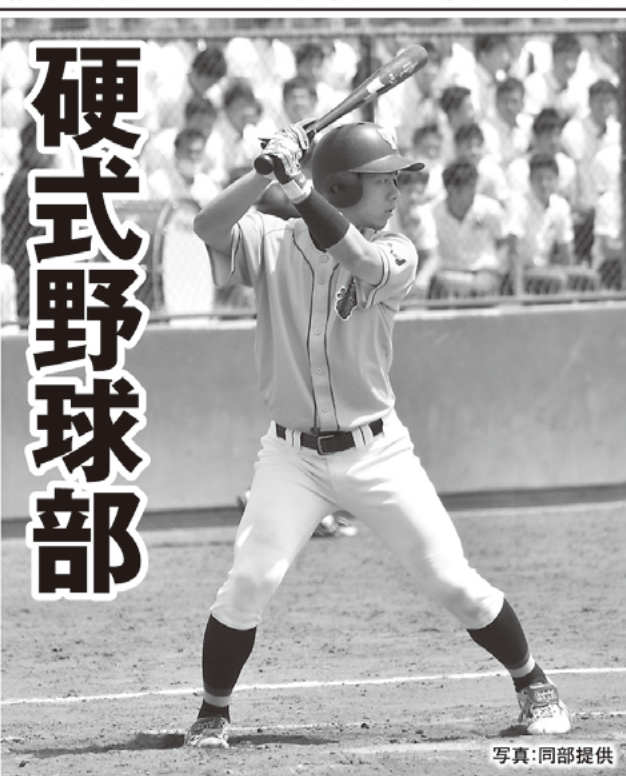


写真:同部提供

である。先頭の4番中島準矢選手(体育4年・佐賀・鹿島高)がヒットで出塁すると、5番の皆神裕平選手(体育3年・茨城・常総学院高)のバントが相手のフィールドャーを誘い、ノーアウト1・2塁とする。その後6番の座馬健人選手(体育2年・静岡・浜松北高)が送りバント、7番の串田真章選手(体育2年・千葉・県立船橋高)がスクイズに成功し、ついに筑波大学が1点を入れることに成功した。

その後試合は1対1のスコアのまま延長戦に入り、延長13回からタイブレーク制により1・2塁と2塁にランナーを最初から置いた状態で試合が進行した。そして13回表、筑波大学に最大のチャンスが訪れる。先頭の高瀬将太郎選手(体育3年・茨城・常総学院高)の打席、相手捕手の捕球ミスに付け込み、ランナーが進塁。2・3塁にランナーが進むと、高瀬選手もフォアボールで出塁し、満塁の状況を迎える。そして、9番打者の若狭大地選手(体育3年・愛媛・今治西高の轍

牲フライで筑波大学が1点を入れた。だがその裏の東海大学の攻撃で悪夢が起きる。先頭の門田選手はフライで抑えたものの、続く9番の平山選手にヒットを打たれ同点にされる。その後1番の千野選手にフォアボールで出塁を許すも、2番の高田選手を三振で抑えた。しかし続く途中出場の中田選手は打球の処理を筑波大学守備陣が誤り、タイムリエラーとなってしまう。結果、この試合は3対2で東海大学の勝利で試合終了となった。

福水大貴主将(体育4年・兵庫・北須磨高)は、大学日本一を目標にしており、また将来的にもこの筑波大学硬式野球部を「勝ち続ける組織」にしたいと語っていた。硬式野球部は近年衰えが立派で、アスレチックデパートメントによるサポートも充実しつつある。こうした支援の中で、筑波大学硬式野球部が「勝ち続ける組織」になるための挑戦にぜひとも注目してほしい。(篠崎陽介)

硬式庭球部
川橋、森崎、牛島躍動

写真:同部提供

意気込んでいた。また、女子ダブルスでもペアを組んだ牛島選手にもお話をうかがったところ、優勝という結果については「ペアの選手（森崎選手とそれほかペアを組んで練習した経験選手に言いたいことはあるかという質問には、二人とも「緒に暴れまわろう」と答えてきた、仲の良さが伝わってきた。最後に牛島選手の今後の目標について伺うと、「私に硬式庭球部の姿に期待したい。」（松本樹）

5月1日から6日にかけて、平成30年度関東学生テニストーナメント大会が開催され、本学からも多くの選手が参加した。では川橋勇太選手体育3年、東京・大成高、女子シングルス部門では森崎可南子選手体育4年、	題のサーブとフォアハンドを、常にその練習の中でも意識して少しずつ改善してきた」と、明確に話してくれた。個人の力が如実に表れるシングルス部門で優勝したことに關しては、「みんな本本当に勝ちたいのはシングルスで、どの大学の選手もシ
	ビューを行ったところ、シングルスで優勝したことに関して「関東大会でのシングルス優勝は初めてだったので、素直に嬉しいうです」と語られた。しかしその一方で、今回の優勝は成長するための通過点であるとも話しており、私たちが以前行ったインタビューで語っていた「学生のうちにシングルスでタイトルをも取っておきたい」という目標を達成しているも、その目は将来へと向いているようだった。最後にこれからの目標を語っていたところ、「自分も周りも楽しいと思うようなプレーをしたいです」と
	ペアの人のボールを生かして私が前でプレッシャーをかけられるようになるように意識して練習しました」と、それだけで練習を生かしたペアワークを意欲していた。牛島選手と森崎選手は同い年で、普段から仲が良く気も遣わずに楽しくプレーできたという。ペアの

男子シングルス部門で優勝した川橋選手は、今回の優勝について「優勝できると思っていたので、自分より格上の選手が多い大会だったので率直にうれしかったです。」と語ってくれた。練習で意識した点については、「課

いるサーブとフォアハンドを磨いて、絶対にインカレでシングルスとダブルス両方で優勝したいと思います。」と、決意を新たにしていた。

女子シングルス・
女子ダブルス
続いて森崎選手にインタ

を新たにしていた。

続いて森崎選手にインタ

写真: 同部提供

大会の裏側で —MEIKEIオープン—

3月24日から4月1日にかけて、筑波大学体育センターにて筑波大学フェスティバル・オープンテニス以下、M.E.I.K.E.I.オープンが開催された。この大会は優勝すれば賞金と順位に關係するAポイントが獲得できる、国際テニス連盟公認の日の大会である。そして、この大会の何よりの特徴が、大会運営を筑波大学硬式足球部が行っているということである。私たちはこの大会の学生統括リーダーである伊藤寛太さん(体育4年、岩手・盛岡第2高)に話を聞き、運営の様子を語っていただいた。

筑波大学では以前にもプロの大会が行われていたが、大会運営をすべて学生主体で行うようになったのは3年前に始まったM.E.I.K.E.I.オープンが初めてであるという。中でも苦勞したのがスポンサー集めと、企業とのやり取りのメールやプレゼンテーション、また広報の掲載方法など大人の仕事のが大変であったそうだ。また、スポンサーへのあいさつ回りも例年通りではうまくいかず、電話や訪問などの直接的なコミュニケーションも必要で、苦勞を重ねたようだった。それでも地道な活動の結果新規のスポンサーも増え、今回の開催とながた。

M.E.I.K.E.I.オープンのコンセプト

結果一覽

結果一覽									
【サイクリング】 第22回全日本選手権個人 タイムトライアル・ロードレース大会 女子U23(13.1km) 梶原悠未(体育3) 優勝 第87回全日本自転車競技選手権大会ロードレース 女子U23ロードレース 梶原悠未(体育3) 3位									
【トライアスロン】 第34回全日本トライアスロン宮古島大会 小嶋岳(体育3) 総合5位 日本人2位 松本晃平(体育2) 総合20位 年代別2位									
【漕艇】 第61回五大学レガッタ 新人ナショナル 2000m 筑波大 第2位 対校男子舵手付きオムニ M4+ 筑波大 第3位									
【水泳(水球)】 2018年度関東学生水球選手権男子部 浦のつばは、「つばは」をテーマ祭りを「であり、」を知らないうちでもお祭りのように楽しめるような雰囲気の大大会が作れたらいいなという狙いがあった」と伊藤さんは語る。そして、その狙いは大会パンフレットにも込められていた。パンフレットを開くとつばは市の観光案内や出場選手へのインタビューのほか、体育専門学群の知識を生かしたストレッチも紹介された。これらの企画は部員が考案したものであり、「学生が考えたアイデアが世に出ることが作った学生にとっても大きなやりがいを感じられたのではないかと」伊藤さんは話してくれた。また、大会当日はイベントを企画し試合以外でも楽しめるような企画を行った。伊藤さんは「準備してきたものが実際に成功して、観客や選手に喜んでくれたことが嬉しかった」と話してくれた。									
このように学生が努力や工夫を重ねて運営してきたMIE I&Eオープンであるが、プロテニス大会のグレード変更に伴い、来年以降の開催が不明であるという。選手からは「アウトホームな雰囲気の大大会だと愛され、地元の方も楽しみにしている」という声も上がっているというMIE I&Eオープン。この大会を今後も存続させていくためにも、ぜひ大会を応援して盛り上げていきたい。(松本樹)									
【柔道】 平成30年度全日本選拔柔道選手権大会 男子66kg級 準優勝 田川兼三(4年) 優勝 男子81kg級 優勝 佐々木健志(4年) 優勝 グランドスラム・フット大会 男子81kg級 優勝 佐々木健志(体育4) 優勝 平成30年度日本学生柔道優勝大会(男子) 1回戦○筑波大7-10 拓殖大 2回戦○筑波大6-0 専修大 3回戦○筑波大4-0 早稲田大 4回戦○筑波大3-2 中央大 5回戦○筑波大3-2 国士館大 決勝○筑波大0-3 東海大 結果 準優勝									
【男子バレーボール】 2018年度春季関東大学男子バレーボールリーグ戦 筑波大0-3 順天堂大 筑波大3-0 慶應義塾大 筑波大3-0 東京学芸大 筑波大3-1 駒澤大 筑波大3-0 東海大 筑波大3-1 国士館大 筑波大3-2 明治大 筑波大3-0 日本体育大 筑波大0-3 中央大 筑波大2-3 早稲田大 最終結果 第2位 敢闘賞 樋口裕希(体育4)									
【女子バレーボール】 2018年度春季関東大学女子バレーボールリーグ戦 筑波大3-1 松蔭大 筑波大2-3 順天堂大 筑波大0-3 日本体育大 筑波大3-0 国士館大 筑波大3-0 日本大 筑波大3-0 嘉悦大 筑波大3-1 東京女子体育大 筑波大0-3 東海大 筑波大3-1 日本女子体育大 最終結果 第3位 ベストアウトサイドヒッター賞 甲南香 第57回東日本バレーボール選手権大会 筑波大3-0 宇都宮大 筑波大3-0 江戸川大 筑波大3-2 東京女子体育大 筑波大3-0 日本体育大 決勝戦 筑波大3-1 青山学院大 最終結果 優勝(2連覇) 最優秀選手賞 丸尾遥香(4年) ベストアウトサイドヒッター賞 川上雛菜(2年) セッター賞 川上雛菜 セッター賞 万代真奈美(2年)									
【陸上競技】 第18回アジア太平洋陸上競技選手権大会(女子) 100mH 4x100mR(1走) 優勝 吉田唯莉 45.94 第2位 走幅跳 吉岡美鈴(体育1) 5m92(+0.4) 第3位 2018年度学生陸上競技個人選手権大会(男子) 100m 東田旺洋(M1) 10.47 第3位 200m 葉師寺亮(医学4) 20.93 第2位 110mH 石川周平(M1) 13.91 第3位 (女子) 100mH 佐々木天(3) 13.48 第3位 三段跳 山下桐子(3) 12m73 第2位 やり投 桑添友花(2) 56m86 優勝									
【男子サッカー】 関東大学サッカーリーグ戦1部 筑波大1-4 明治大 筑波大4-0 順天堂大 筑波大1-1 東洋大 筑波大2-0 法政大 筑波大2-1 国士館大 筑波大1-1 桐蔭横浜大 筑波大0-1 専修大 筑波大0-0 東京国際大 筑波大5-0 流通経済大 筑波大4-3 駒澤大 茨城県サッカー選手権大会兼天皇杯代表決定戦 2回戦 筑波大0-3 ちちぶ由緒 決勝 筑波大3-4 流通経済大学 ドラゴンズ龍ヶ崎									
【女子サッカー】 筑波大0-3 群馬大学 筑波大1-2 尚美学園大 筑波大1-2 国士館大 筑波大0-2 国士館大 関東大学サッカーリーグ戦2部 筑波大1-1 武蔵短期大 筑波大1-1 東京国際大									
【ラグビー】 関東大学春季大会 筑波大38-21 早稲田大 筑波大78-14 日本体育大 筑波大59-7 中央大 筑波大38-26 日本大 最終結果 Bグループ優勝									
【オリエンテERING】 2018年度関東学生連「ペアオリエンテERING大会」 MF 関口資源 2位 WF 野口雲希 3位									
【体操競技】 第57回NHK杯体操 男子種目別 跳馬 小森敬介(体育3) 1位									
【男子ハンドボール】 平成30年度関東学生ハンドボール春季リーグ戦 最優秀選手賞 牧野イサ(体育4) 優秀選手賞 森永浩壽(体育4) 新人賞 徳田廉之介(体育1)									
【女子ハンドボール】 平成30年度関東学生女子ハンドボール選手権大会 最終結果 第3位 優秀選手賞 海老原加英(体育4) 特別賞 登川愛(体育4) 優秀新人賞 伊地知愛妃(体育2)									
【フリスビー】 第31回全日本フリスビー・エアリアル競技選手権大会 SERC混合シニアクラス モーニング・レボス競技 女子ライオン 第5位 フリスビー 古川 セカンド 深澤 オリンピック 古川									
【男子バスケットボール】 第67回関東大学バスケットボール選手権大会 筑波大109-66 立教大 筑波大90-70 明星大 筑波大73-72 青山学院大 筑波大64-68 中央大 筑波大99-63 中央大 総合成績 優勝(3連覇) 最優秀選手賞 牧野利(体育3) 優秀選手賞 玉木祥護(体育4) 増田啓介(体育3)									

バドミントン 女子1部 4年連続優勝



リーグ戦 5戦全勝!

写真:同部提供

4月28日から5月4日まで、日本体育大学健志台キャンパスで関東大学春季リーグ戦が行われた。この大会において筑波大学バドミントン部は女子団体部門で優勝を果たし、4年連続優勝となった。また、個人としてもMVPに安田美空選手(体育3年、青森・青森山田高)が選ばれた。

今回の大会で安田選手にインタビューを行うことができた。今回の大会で安田選手は、ダブルスでペアを組んだ香山未帆選手(体育2年、岡山・倉敷中央高)と二人合わせて15戦14勝という素晴らしい結果を残し、チームを優勝へと導いた。リーグを振り返って、安田選手は、「去年の関東大学バドミントン秋季リーグ戦で最下位に終わり、5季連続優勝を逃してしまっ。秋季リーグが終わってからは、この時に味わった気持ちを忘れ

ずに練習できたことが今回の優勝に結びついたと思う。また、秋季リーグと春季リーグの間にあったインターカレ(全日本学生バドミントン選手権大会)を4連覇したが、そのときのチーム力を活かせることなく、出場する選手もいない選手も入ひとりが役割意識をもつて春季リーグに臨めたこともよかった。個人としては香山選手と練習中から切磋琢磨できたことが大きかった。」と振り返った。

改善したい課題について聞くと、「チームとしては全勝優勝だけれど、取られてしまったポイントやゲームがある。筑波大学バドミントン部の女子は人数が少なく、シングルとダブルスを兼ねる選手もいるため、体力をなるべく残して勝つ必要がある。インターカレは5ポイント中、3ポイントとするとその後のゲームは打ち切りになるため、ミスは極限

まで減らして、3対0での勝利を狙っていた。」と答えた。バドミントン部はフィジカル面では、ほかの大学よりも強い。そのためにチームとして、今後技術面を磨くことで、人数が少ないというハンデを覆して勝つていきたいと話してくれた。

次にある大きな大会としては、8月31日〜9月7日に宮城県仙台市で行われる、東日本学生バドミントン選手権大会がある。この大会に向けて、安田選手は、「今まで部員の半分しかこの大会に出場できていないが、今年は女子全員が個人戦に出場することが目標」と話してくれた。

また、大会5連覇がかかる全日本学生バドミントン選手権大会の目標としては、「インターカレ5連覇は達成しなけれはならない最低目標。個人としてはダブルスとシングル

写真:同部提供

の3冠を目指している。」と力強く語ってくれた。最後に安田選手に部活をどうやってモチベーションにしているのかを伺うと、「バドミントン部はプレーだけで成り立っている部活ではなく、映像や点数推移の分析を行うことで客観的に自分のプレーを捉えることができ、高校

までの大学までは、このやり方で行っていた。バドミントン部はプレーだけで成り立っている部活ではなく、映像や点数推移の分析を行うことで客観的に自分のプレーを捉えることができ、高校

までの大学までは、このやり方で行っていた。バドミントン部はプレーだけで成り立っている部活ではなく、映像や点数推移の分析を行うことで客観的に自分のプレーを捉えることができ、高校

6月30日、浦和駒場スタジアムにおいて秩父宮賜杯第50回全日本大学駅伝対校選手権記念大会以下、全日本大学駅伝関東学生陸上競技

までにはない大学ならではの取り組みがモチベーションになっている。」と答えてくれた。インターカレをして、安田選手は最終チームのことを考えているような印象を受けた。競技に集中するあまり周りが見えなくなる実力者がいる中、競技力があるからこそ周りのことを考えられる安田選手からは、周囲との関わりを大切にしているのを感じた。今後も筑波大学バドミントン部と安田選手の活躍に期待したい。(西村生)

技連盟推薦校選考会(以下、予選会)が行われた。筑波大学は昨年に引き続き予選会への出場を叶えたが、総合順位は16位に終わり、惜しくも本戦への出場を逃した。この予選会では各大学上位8名の1万メートルの記録で出場権が決まる。筑波大学のエン

全日本大学駅伝は箱根駅伝と異なり、大学院生にも出場権がある点が特徴だ。今回の予選会では大学院生の2名、吉成祐人選手(生命科学部1年、栃木・佐野日大高)と、才記壮人選手(人間総合科学研究科修士課程2年、富山・富山高)がそれぞれ3組と4組に出場した。吉成選手は「今年は例年より気温が高く、レースが難しくなるので、持ちタイムで走る

自分たちにも通過する可能性があるかと思えて臨んだ。昨年よりも強くなったチームを見たいという気持ちがあった。」とレース前の意気込みを振り返る。才記選手は自身のレースについて「チームとして暑熱対策に取り組んでいるが、冷房下で過ごさざるを得ない時間が長かったことや暑熱環境下での練習不足から、暑熱順化が遅れてしまっ

今年の前半は、大学アメフト界に波乱の出来事がありスポーツマンシップについて考えさせられることが多いような気がする。筑波大学の体育会ははじめ、様々な活動の活躍を見ていて、結果にばかり目が行ってしまいがちになります。今回の編集会議でも、優勝、連覇という言葉が編集室を飛び交いました。私たちは、メディアであるという特性上、話題性のあるものや出来事を取り上げがちですが、スポーツには、多くの在り方が存在することを忘れてはいけないうのだと痛感しています。勝つことだけがスポーツではないという場面や、ただ純粋に「好き」な競技に取り組む選手たちのひたむきな姿も広く伝えていきたいと思っています。ですのでぜひ、今回の筑波スポーツを手に取っていただけたらと思います。(蓮沼礼子)

次は編集員2年、西村生さんです。

発行所/筑波大学体育会
(TEL.029-853-2589)
発行人/神田敬邦
編集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/松本樹

蓮沼礼子(看護2年)
編集スタッフ
篠原美奈(比文4年)
佐藤源資(資源4年)
千葉蓮(国語4年)
山中貴裕(医療科4年)
島田すみれ(比文3年)
外本暖(国語2年)
西村生(体育2年)
篠崎陽介(国語1年)

松本樹(比文2年)
広報
菊田文香(国語3年)
会計
蓮沼礼子(看護2年)

今年前半は、大学アメフト界に波乱の出来事がありスポーツマンシップについて考えさせられることが多いような気がする。筑波大学の体育会ははじめ、様々な活動の活躍を見ていて、結果にばかり目が行ってしまいがちになります。今回の編集会議でも、優勝、連覇という言葉が編集室を飛び交いました。私たちは、メディアであるという特性上、話題性のあるものや出来事を取り上げがちですが、スポーツには、多くの在り方が存在することを忘れてはいけないうのだと痛感しています。勝つことだけがスポーツではないという場面や、ただ純粋に「好き」な競技に取り組む選手たちのひたむきな姿も広く伝えていきたいと思っています。ですのでぜひ、今回の筑波スポーツを手に取っていただけたらと思います。(蓮沼礼子)

チームの動きについては「各自がレース後に、風向きが変わる場所、給水地点で激しいペース変動があることなどをすぐに冷静に次の組に伝えていた。最後まで諦めずに戦う姿勢があった。」と昨年から成長を実感したようだ。

10月の箱根駅伝予選会に向けて、この予選会が大学駅伝への最後の挑戦だったと言った才記選手は「練習を引く張り、動きのアドバンスや競技の相談などを通じて今まで受けてきた恩を後輩との関わりの中で返していければと思う。日本インカレでも院生が学群生と一緒になることで、学群生の箱根とインカレとの両立に向けて自分の走りでも貢献し、背中を見ていく」と抱負を掲げた。吉成選手も「本気で目指して自分磨きことに意義があると思う。後輩たちには箱根を目指してどこまで何を頑張ってもらいたい。もちろん一緒に練習する時は切磋琢磨すること、チームのレベルを上げていきたい。」と自分の役割を意識する。筑波大学チームを支え、時に引く張るふたりがチームにもたらしている力量は計り知れない。(島田すみれ)



写真:同部提供

写真:同部提供

第20回 リレーコラム

初めまして。今回コラムを担当させていただきます。外本で何を書いても良いとのことなので、筑波スポーツ編集部に人に入ったときから今までの日々を思い出して書いてみようと思います。

私が筑波スポーツ編集部に入ることを決めたのは、スポーツで日本、「世界を目指したい」という人とお話をしてみたい、という人とも邪な

思いからでした。そして、今、夢は叶い、本当に色々な方々に取材をさせていただきまし

現在、私は硬式野球部のマネージャーを務めさせていただいています。マネージャーとしてからというもの、思うように試合を観に行けず、記事の方もあまり書けていませんが(本当にすみません)これまででこのくらいは、経験ばかりで、日々学ぶことの多い新鮮な毎日です。やる前は始めるのに障害がたく

